

異なるジャンル、共通する感覚

萩原朔太郎生誕百三十年記念・前橋文学館特別企画展

「パノラマ・ジオラマ・グロテスク——江戸川乱歩と萩原朔太郎」を開催して

津 島 千 絵

萩原朔太郎の生誕百三十年にあたる二〇一六年、十月一日（土）～十二月十八日（日）、前橋文学館では特別企画展

「パノラマ・ジオラマ・グロテスク——江戸川乱歩と萩原朔太郎」を開催した。

日本における推理小説の開拓者・確立者である乱歩と、近代詩の変革者・口語自由詩の確立者である朔太郎は、今

も多く読者を持つ。取り上げる材料は膨大だが、本展では二人の交流と共通項に絞って紹介し、「Ⅰ乱歩と朔太郎の交流」「Ⅱキーワードでみる乱歩と朔太郎の共通項」の二部構成とした。

乱歩と朔太郎の交流

「Ⅰ 乱歩と朔太郎の交流」は、「書簡にみる二人の交流」「互いの評価」の二章で展開した。

朔太郎が乱歩に宛てた書簡は、一九三一（昭和六）年から一九四一（昭和十六）年まで、封書と葉書計十通が確認されており、出会いから朔太郎が亡くなる前年までのおよそ十年の間に、二人の親交が深まっていた様子を迎えることができる。筑摩書房版『萩原朔太郎全集』第十三巻に掲載されているので、内容は誰でも確認することができるが、現物の書簡は、ご遺族の平井憲太郎氏により立教大学

江戸川乱歩記念大衆文化研究センター（以下、大衆文化研究センター）に寄託されている。乱歩が大切に保管していたこの書簡をお借りできたことで、展覧会の軸が固まった。

これに加えて、同じく乱歩の愛読者であった丸山薫に朔太郎が宛てた葉書、朔太郎の没後に『探偵小説四十年』（一九六一年七月）をまとめる際に、乱歩が朔太郎の長女・萩原葉子に宛てた書簡を展示した。

「互いの評価」では、乱歩と直接交流が始まる以前の一九二六（大正十五）年六月、「探偵趣味」第九輯に朔太郎が書いた「探偵小説に就いて」や、朔太郎が賞賛した「人間椅子」、「パノラマ島奇譚」などを紹介し、「人間椅子」の草稿や「パノラマ島奇譚」初出の「新青年」等を展示した。

一方、乱歩が愛した朔太郎作品は、「死なない蛸」「猫町」関連の資料を展示。「新青年」の編集者だった渡辺温の朔太郎宛書簡や、朔太郎の乱歩宛献呈本である『猫町』、『猫町』を「宝石」に掲載する際、乱歩が朔太郎の親戚に宛てた書簡等を展示した。

また、『新青年』趣味第十六号（二〇一五年十月）に、乱歩の生前未発表原稿「独語」三十八枚が掲載されたが、

昭和十一年「六月廿七日早朝」の箇所に、「今日までに萩原朔太郎君から贈られた本／『猫町』『青猫』『絶望の逃走』『廊下と室房』と題して、乱歩が朔太郎の著書について書いている。この部分の自筆原稿四枚を、朔太郎の乱歩宛献呈本『定本青猫』『絶望の逃走』『港にて』『阿帯』と共に展示した。

キーワードでみる乱歩と朔太郎の共通項

「II キーワードでみる乱歩と朔太郎の共通項」は、「探偵と曲者」「浅草趣味」「パノラマ趣味」「身体の変容」の四章で構成した。

「探偵と曲者」では、朔太郎の詩作品「殺人事件」の原稿や「病気の探偵」の書かれた自筆ノート、乱歩の「D坂の殺人事件」「屋根裏の散歩者」初出の「新青年」などを展示。また、二人が愛したフランス製連続活劇映画、女探偵「プロテア」の画像や、「プロテア」の名が登場するそれぞれの作品等を紹介した。

「浅草趣味」では、浅草をモチーフにした二人の作品と共に、出会った当初、朔太郎が乱歩を誘って浅草公園の木馬（メリーゴーランド）に「ゴットンゴットンと乗った」という、乱歩の回想を紹介した。

「パノラマ趣味」では、明治中期から末期に上野・浅草にあり、幼いころに二人が見たというパノラマ館を、写真や図版、その魅力を綴った二人の文章や作品により紹介した。

共通の趣味であった手品のコーナーでは、「手品の種」と書かれた乱歩遺蔵の小箱に入っていた手品道具と、朔太郎の遺品であるトランプ等を展示した。図録にも執筆していただいた栗原飛宇馬氏（文学研究者）には、展示期間に三度、展示室で実演を交えて手品道具についての解説をしていただいた。

「身体の変容」では、近代化の中で変容する身体がテーマとして現れる二人の作品を紹介。朔太郎の詩「腕のある寝台」「その手は菓子である」の原稿や、乱歩の小説『孤島の鬼』『猟奇の果』初版本のほか、四肢が失われた人間という同じモチーフが描かれた、朔太郎の詩的散文「禁断された言葉」記載のノート、乱歩「芋虫」の初出誌「新青年」（初出では「悪夢」）なども展示した。

これらのキーワードは、本展の監修者である安智史氏（文学研究者）による、乱歩と朔太郎の様々な共通項を捉えた言葉からピックアップしたもの。安氏に章ごとに書いて

いただいた解説文は、展覧会を理解する重要な手助けとなり、また、本展のために作成していただいた「江戸川乱歩と萩原朔太郎略年譜」は、作品が生み出された背景、交流の様子を記すと共に、二人の作品を共通項で捉えた、これまでにないユニークなものとなった。

朔太郎の乱歩邸訪問

一九三五（昭和十）年冬、朔太郎が初めて池袋の乱歩邸を訪れた際、乱歩は書齋兼客間にしていた土蔵に朔太郎を案内し、二人は日本酒を酌み交わしながら、内外の怪奇文学について語り合った。朔太郎は乱歩の「パノラマ島奇譚」を「あれはいい、あれはいい」とほめたという。乱歩がエッセイ「探偵小説三十年」（『宝石』一九五一年九月初出、『探偵小説三十年』一九五四年十一月、『探偵小説四十年』一九六一年七月）に書いているが、二度目の資料調査で大衆文化研究センターを訪れた際、研究員の落合教幸さんが「こんなものがあります」と言って、このエピソードが記された乱歩の自筆原稿を見せてくださった。二十二枚一綴りの一枚目に「探偵小説三十年（7）」と記され、「宝石」に掲載した時のものとわかる。肉筆の文字から、朔太郎の没後十年近くを経て、懐かしく回想する乱歩の様子

が想像され、感慨深かった。

この原稿を展示すると共に、展覧会に際して、乱歩の孫・平井憲太郎氏と朔太郎の孫・萩原朔美前橋文学館長にこの様子を再現してもらい、写真を撮影した。太い梁と黒光りする階段、壁面いっぱい書棚、「屋根裏のような、或いは船室のような感じがする」と言って朔太郎が興がった空間で、着物姿の二人が談笑している写真を図録に掲載すると共に、会期中、展示室の入り口に、百六十センチ×百二十センチの大きな写真パネルで展示した。

展示の幅

本展では、大衆文化研究センターおよび平井氏より、乱歩が所蔵していたたくさんの貴重資料（原稿、書簡、遺蔵書、初出誌、遺品等）をお借りして展示すると共に、前橋文学館所蔵の朔太郎関連の原稿やノート、書簡、初版本、雑誌等を展示した。

これらの貴重資料の展示に加えて、来館者が親しみやすい展示、乱歩や朔太郎の世界を体感できるような展示を考えた。少ない予算の中で、大がかりなものではできなかったが、大衆文化研究センターからお借りした乱歩邸の紹介映像と、乱歩が上諏訪で横溝正史一家を撮影した映像を、フ

ラットなスクリーンではなく、ブラインドに映写して上映した。また、板塀ののぞき穴から展示室をのぞき見て、窃視者の気分を味わえるようにしたり、ケースの中を除くと天井の黄金仮面が映ったり、といった仕掛けもした。

展覧会のタイトル「パノラマ・ジオラマ・グロテスク」は、二人に共通する、世界を人工的につくり変えることへの志向、好奇という意味を伴った猟奇Ⅱグロテスクへの志向を意図している。キャッチコピー「ぐるくて、かわいい!」「変態だつていいじゃない。」も、赤を基調としたポスター等のヴィジュアルデザインと共に話題となった。乱歩と朔太郎の文学には、こうした幅を許す豊かさ、やわらかさが具わっていると感じた。

記念イベント

十一月五日（土）には、美学者・谷川渥氏に、「孤独な窃視者の夢想——乱歩と朔太郎」と題してご講演いただいた。窃視Ⅱのぞき見ること、人工的な何か通して見ること、といった観点から、乱歩と朔太郎の作品を、内外の文学、心理学、哲学などを交えながら、丁寧に解説していただいた。豊富な知識にもとづく清新な読解は、来館者の知的好奇心を刺激するものとなった。

十一月十二日(土)～二十三日(水)には、新潟市巻郷土資料館から「のぞきからくり」がやって来た。組み立てると幅三・五メートル、高さ四メートルほどにもなり、文学館のロビーいっぱいには聳えているような迫力があつた。十一月十二日(土)、十九日(土)、二十日(日)には、保存伝承口上師の土田年代氏による実演が行われた。演目は乱歩の「押絵と旅する男」に登場する「八百屋お七」。レンズの付いた穴からのぞいた押絵は立体的で、朔太郎が好んで撮影した立体写真に通ずるものがあつた。口上の節とあいまって、懐かしくも絢爛な世界がのぞき穴の奥に広がっていた。

最終日の十二月十八日(日)には、平井憲太郎氏をお招きし、安智史氏を進行役に、萩原館長と「猟奇な二人の病気な話」というタイトルで対談をしていただいた。対談の前には、栗原飛宇馬氏が手品についてのお話と実演をしてくださった。老若男女がためかけ、乱歩と朔太郎の交流のエピソードや、平井氏の語る乱歩の思い出に聴き入った。会場からの質問コーナーでは、二次創作についてどう思うか、孫で良かったことと悪かったことなど、たくさんの方の興味深い質問が飛び交った。

パノラマ・ジオラマ・グロテスク最終章

展覧会の終盤には、「パノラマ・ジオラマ・グロテスク最終章——江戸川乱歩と萩原朔太郎」として、「丸尾末広『パノラマ島綺譚』漫画展」と、〈街のなかの本屋〉「らんばのコードモ/コードモのらんば」がスタートした(二〇一六年十二月一日～二〇一七年一月九日)。乱歩の「パノラマ島奇譚」を漫画化し、手塚治虫文化賞新生賞を受賞した丸尾末広氏の『パノラマ島綺譚』の原稿データを借用し、拡大してパネル展示した。引き延ばして見ると、丸尾氏の比類ない画力で描かれたパノラマ島が、さらなる迫力でせまってきた。また、子供時代に多くの人が親しんだ、ポプラ社の少年探偵シリーズ表紙絵のパネル展示と共に、文庫本を販売した。

終わりに

前橋文学館では、これまでも朔太郎と交流のあつた文学者を展覧会で紹介してきたが、主に詩人を取り上げることが多かった。このたび、ミステリ界の巨人である乱歩を取り上げたことで、旧来の乱歩ファンのほか、パソコンのゲームで乱歩や朔太郎を知った若者たちなど、これまで文

学館に足を運ばなかった層の方々が来館してくださった。また、『猫町』や「死なない蛸」ほか、今まで展示の中心になりにくかった朔太郎作品にスポットを当てることができ、展覧会が広がりのあるものとなった。

もっといういろいろな見せ方や仕掛けができたのではないかという思いはあるが、異なるジャンルながら驚くほどたくさんある二人の共通項や、親しく交流していたとわかる興味深いエピソードを、様々な資料を調査し紹介できたのは、とても楽しい得がたい体験だった。展覧会が終了し、十二月二十一日に大衆文化研究センター（乱歩邸）と平井氏に資料を返却したが、資料調査、借用、返却と、初夏から冬にかけて五回にわたって訪れた大衆文化研究センターをあとにしたときは、気が抜けたような寂しいような気持ちになった。

全面的にご協力いただいた平井憲太郎氏、研究センターのスタッフの方々には、たいへんお世話になりました。また、監修の安智史氏をはじめ、図録にご寄稿いただいた高橋世織氏、歌野晶午氏、栗原飛宇馬氏、ご支援をいただいた皆々様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

（秋原朔太郎記念・水と緑と詩のまち前橋文学館学芸員）



栗原飛宇馬氏による手品の実演と解説



学芸員による展示解説

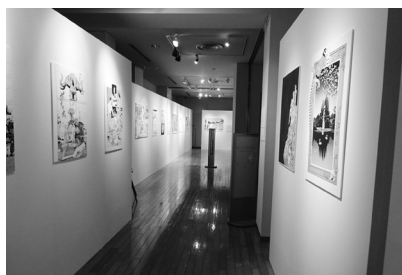




対談「猟奇な二人の病気な話」
左から萩原館長、平井氏、安氏、栗原氏



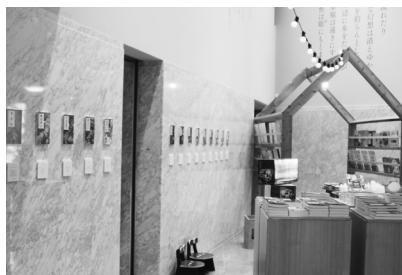
展示室



丸尾末広『パノラマ島綺譚』漫画展



谷川渥氏講演
「孤独な窃視者の夢想——乱歩と朔太郎」



少年探偵シリーズ展示



のぞきからくり「八百屋お七」実演